

シナイ通信

第16号

平成 22 年 3 月 31 日

NPO 法人 シナイモツゴ郷の会



TEL/FAX 0229-56-2150

MAIL shinaimotsugo93ks@ybb.ne.jp

<http://www.geocities.jp/shinaimotsugo284/>

989-4102 宮城県大崎市鹿島台木間塚

字小谷地 504-1 鹿島台公民館内

評価された自然再生モデルと実践

新体制で進めるだれでもできる技術の開発と体制作り

水環境文化賞を受賞

日本水環境学会から水環境文化賞を受賞しました。二宮理事長が3月16日に福岡市の福岡大学で開催された表彰式に出席しました。

水環境文化賞は、水環境の保全・創造に関する社会・文化活動が顕著である団体または個人に贈呈されるものです。全国から1団体が選ばれる大変価値ある賞です。受賞理由は次の3点です。

- ① 絶滅危惧種シナイモツゴの保護に着目した水環境の保全
- ② 幅広い年齢層の参加促進による啓発
- ③ 農業支援等と連携した水環境の改善

だれでもできる技術を駆使したシナイモツゴ里親制度やシナイモツゴ郷の米認証制度などによる地域と連携した取り組みが高く評価されたものです。これを機に一層の努力を傾注して水環境の保全に貢献したいと考えます。

2月総会で新体制スタート

平成22年度総会が2月20日に鹿島台の尾根会館で開催されました。21年度収支決算や22年度事業計画・予算が承認された後、会結成以来、代表として中心的な役割を果たしてきた安住祥理事長から健康上の理由によって辞任の意向が示されました。今後、安住さんは顧問相談役として関与することになりました。出席した会員全員が安住理事長の長年にわたるご尽力に対し、心から感謝すると共に健康のご回復を祈念しました。

これを受けて、新理事長の選出が行われ、満場一致

で二宮景喜氏が選ばれました。二宮氏は教育者としての経験を生かしながらシナイモツゴの里親たちを長年指導し、里親制度を強固に確立しました。また、長谷川政智氏が新理事に就任しました。新体制の下、今回受賞の水環境文化賞受賞をバネにして、さらに飛躍を目指します。

好評の成果発表会と特別講演

成果報告会では、久保田会員が「ミジンコ簡単培養技術の開発」、宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団の藤本泰文博士研究員が当会との共同研究「フェロモンを利用した外来魚駆除技術の開発」について報告しました。いずれも自然再生の画期的な技術開発です。

特別講演では、北海道大学水産学部の上山雅秀教授が「生物多様性とサケ」と題して講演しました。北海道で最も深刻な外来魚ブラウントラウトの被害実態や対策、サケが内陸深くもたらず海の恩恵など、とても興味深い内容でした。

始動した新事業

平成22年は大阪コミュニティ財団(東洋ゴムグループ)の助成事業および宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団と全国ブラックバス防除ネットワークとの共同プロジェクトを中心に自然再生-だれでも出来る簡単技術の開発と体制作り、そして成果の発信普及を進めます。

■ ホームページ4月リニューアル ■

■ ご意見・感想をお寄せください。 ■

■ 管理人：長谷川、坂本 ■

理事長就任ご挨拶と水環境文化賞受賞のご報告

理事長 二 宮 景 喜

雪が多く、厳しい寒波が遅くまで居残る冬でしたが、いよいよ春、野外での活動を始める時期になりました。会員の皆様にはお元気でお過ごしのことと思います。

さて、このたびの総会で、理事長のご指名をいただきました。全国的にも注目されている本会の活動を、安住前理事長さんのように整然と運営していけるかどうか不安ではありますが、皆様のご指導とご協力をいただき、鋭意努力したいと思っております。

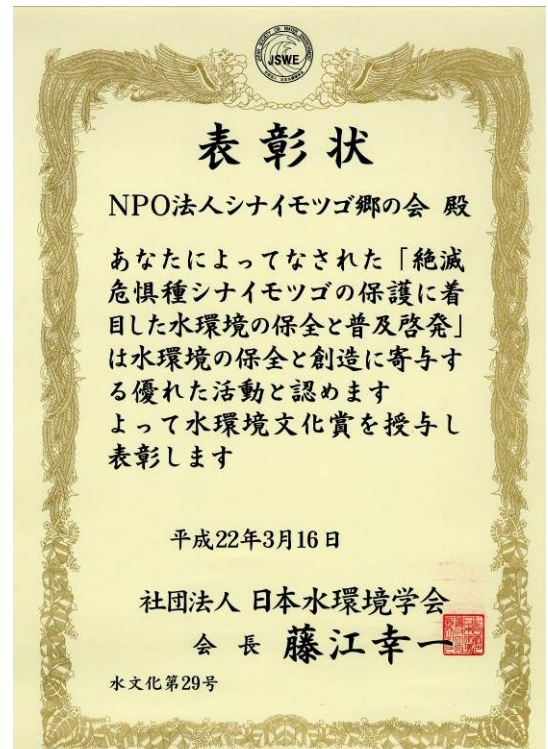
3月20日の定例会で本年重点とする活動について（1）外来魚対策（2）在来魚の保護増殖（3）秋のシンポジウムの3つが高橋先生から示されましたが、他にも継続的に行う活動が多々あります。継続するものと新しい取り組みとバランスをとって進めてまいりたいと思います。いずれにしても、また忙しい1年になると思いますのでよろしくお願いします。

次にうれしい報告をいたします。しばらく前から日本水環境学会の水環境文化賞の候補に上げていただいていたおりましたが、2月下旬に内定の通知があり、3月16日に九州の福岡で行わ

**受賞を記念して郷の会パンフレットを
大幅改修して印刷中**
配布希望の方は事務局へご連絡ください。
制作担当：坂本・久保田・高橋

れた表彰式に郷の会を代表して出席してまいりました。「絶滅危惧種シナイモツゴの保護に着目した水環境の改善と啓発活動」が受賞の理由ですが、里親制度による環境教育や郷の米の取り組みによる水環境の保全が特に評価されたようです。当日は学会の会員数百人が出席する中、藤江幸一会長さんから賞状と大きなメダルをいただきました。その後、スピーチを求められ、郷の会の活動を短時間説明してまいりました。

平成21年度の受賞は本会だけで、平成8年に同賞が創設されて以来、全国で23番目の受賞となります。このような全国規模の権威ある賞をいただきましたのも、郷の会会員の長年の地道な活動が認められてのことです。また、郷の米づくり手の会や里親の小学生の協力、また市民の支援をいただいたおかげですので、多くの方たちと喜びを分かち合いたいと思っております。本会をご推薦くださいました日本水環境学会東北支部の皆様にも、この場をお借りして深く感謝申し上げます。



「かしまだいシナイモツゴ郷の米」生産・販売2年目を願みて

かしまだいシナイモツゴ郷の米づくり手の会 会長 吉田 千代志

「かしまだいシナイモツゴ郷の米づくり手の会」の活動に対し、NPO 法人シナイモツゴ郷の会、大崎市、みどりの農協、報道機関等多くの皆さんのご支援のもとに取り組みの充実を図ることができました。



6月田植え直後の郷の米水田
田んぼには生き物がたくさん

特に認証団体である NPO

法人シナイモツゴ郷の会の皆さんには、づくり手の会の活動に際し、ご指導、ご支援いただき紙面をおかりしまして、厚く感謝を申し上げます。

初年度の昨年は、づくり手の会会員10名・生産者4名の小さな組織でした。大崎市の天然記念物であり絶滅危惧種でもある「シナイモツゴ」の保護活動と地域での環境保全活動、付加価値を高めた米の生産・販売の取り組みに大きな反響を呼び、新聞社・放送局・農業関連団体など多くの取材を受け、全国的に知られることになりました。

発足2年目の21年度は、づくり手の会会員12名・生産者6名となり、地域の皆さんにも活動の理解が深まり、多くの協力を頂けるようになりました。また、天候不順の影響で、心配されたお米の品質も秋の天候回復で持ちなおし、期待された美味しいお米に仕上がりました。お届けすることができました。特に今回は、事



秋空の下、郷の米収穫祭で
サポーターが稲刈り体験

前の米予約が前年の2倍に増え、皆様に「シナイモ

ツゴ」の保護活動の理解と安心・安全で美味しいお米として認知されてきた表れだと、心から感謝しております。

また、本年も9月6日にシナイモツゴ放流ため池確保事業として池干し作業を地域の人々と実施し、ブラックバスの駆除も併せて行いました。

9月25日には、ミヤギテレビ「OH! バンデス」の取材があり「かしまだい品井沼ヒシ」の収録につくり手の会も参加し、番組司会のさとう宗幸さんとシ



今年も大人気の
シナイモツゴ郷の米

ナイモツゴ郷の米で炊き込んだ美味しい「ヒシごはん」を堪能しました。

10月4日には、仙台市や富谷町などから40人程が集まり、郷の米の稲刈り体験会を開催。多くの子供たちが参加して、稲刈り鎌やコンバインに乗っての刈り取り・棒掛け体験におおはしゃぎで、和やかな会となりました。お昼には郷の米の新米おにぎりやとん汁を美味しく頂き、シナイモツゴの発見されたため池やトマト栽培の見学会も同時に開催させていただきました。

10月17日には、NPO法人シナイモツゴ郷の会主催による東北大学農学部で開催されたシンポジウムにもパネラーとして参加し、活動紹介をしております。

今後とも地域の環境を守り、地域の食料を育て支える想いを大切にし、消費者の理解と共生を求めながら小さな輪を広げて行きたいと考えています。活動組織としては始まったばかりでまだまだ不十分ですが、今後とも皆様にはご指導ご支援宜しくお願い申し上げます。

「OH! バンデス」ヒシ取材記

門間忠良

四角ばったスポーツカー（名前は知らない）が鹿島台公民館の駐車場に滑り込んできた。車から降りてきたミヤギテレビの人気番組「OH! バンデス」のキャスターで歌手のさとう宗幸氏は、すぐに本会会員で高校の同級生の光太郎さんを見つけて、「しばらくぶりです。光太郎君はオレにくらべて頭イガッタ（良かった）からね」と古川弁丸出しで話しかけた。一瞬の内に座の雰囲気打ち解け、数十年来の知己のような空気が取り巻いた。

ヒシが育っている田んぼは、車で10分弱の西方の地にあり、それぞれ車に分乗して向かう。沢の奥まった場所に田んぼがあり、里山が、秋色未だしの感がするも、日本的な原風景の中にヒシは生育している。胴長を一緒に履きながら会話も弾み、変な緊張感を抱かせない様な気配りも伝わってくる。スタッフが私のシャツにだけマイクを取り付ける。「ヤバイ！取材に対して答えるのは自分だけか、皆で応対するのではなかったのか、それは聞いていないよ」（――）!! しかし「どうせ生放送ではない。上手く編集するだろう」と、言い聞かせる。

イヨイヨ収録が始まる。宗さんと私二人を中に、郷の会のメンバーが後ろに控える中での会の紹介が「休耕田の利用の仕方にもいろいろあります。ココ鹿島台ではヒシを栽培しております」という始まりであった。「あっ、そういうことでの取材か」と、取材の主旨さえ知らないで、現場に臨んだ自分のノー天気さを反省しながら、頭を切り替える。インタビューに答える形で、引き出しやすく尋ねられるので、何とか破綻もせず応じられたが、内容はあまり記憶にない。シナイモツゴを放流したため池から水を引いた田んぼでの無農薬栽培であることと、例年、ハクイムシの被害に会うので、それから守ることに腐心をしたような話をしたと思う。

次に、田んぼに入りヒシの採取にかかる。時期としては、ヒシを採取する最盛期は過ぎ、どの株にもたくさんの実がついているとは限らない。会の人たちが気を利かせて、できるだけたくさん実のついた

株を、宗さんの前に差し出し収穫の喜びを感じさせるようにしたり、ヒシの実のTV映りが良くなるように気配りしている。宗さんも、採取しながら田んぼに入った時の足下に伝わる泥の感触や、水中からヒシの株を採り出しながら、その作業を喜んでいる。「田んぼサ入んのはチャッコイ（小さい）時以来だ



宗さんにヒシ栽培の説明をする門間理事

なや」と、古川弁で屈託なく話をしながらハシヤイデいる様は、泥んこ遊びを心から楽しんでいるような感じがした。

再び車に分乗して、ヒシごはんの試食の会場である広長地区のコミュニティセンターに向かう。長机の上に、里山の秋の味覚である枝の付いたアケビや栗のイガを花器に生けて、野趣あふれる季節感で地域の人たちが待っていてくれた。話は少しそれるが、宗さんはヒシの採取をしながら、私と光太郎さんの会話の中から、私を高校の先輩であることを察したらしくそのことを聞いてきたので「そうだ」と答えた。その後、宗さんは、先輩である私に番組中に恥をかかせないようにするために、噛んで含める様なわかりやすい語り口で問いかけてきたので、ボロを出さずに済んだことは言うまでもない。実によい後輩を持ったもんだ。

閑話休題。品井沼の干拓の歴史や入植者の苦労、鹿島台の水との闘いなど、広長地区の方々や郷の会の人々との話題が尽きない。ホクホクした歯ごたえの甘いヒシごはんをお替わりし、キノコ汁や手作り

の自慢の漬物などのご馳走をいただく。TV の放映予定を伺ったり、地域の人々は宗さんとツーショットでカメラに収まったりして、短い時間であるが、楽しい時間を過ごした。実りの秋を迎えた田んぼを吹きわたる風と共に、TV クルーを見送りながら、放映後はヒシの注文の引合が多くなるだろうと思った。最後に広長地区の高埒区長さんをはじめ地域の方々の心のこもったご歓待に改めて感謝を申し

上げ末尾といたします。

後日談：放映後、同級生の友人から娘が盛岡で見たと言ってきたと云う。彼は高校のマンドリンクラブで、宗さんはマンドリンを、彼はギターを弾いており、宗さんにギターの手ほどきをしたのは自分であると言う。「青葉城恋唄」のレコードが発売された時は、10 枚ほど購入し知人に分け与えたと、昔言っていた。

「第4回鹿島台市民文化祭」に参加して

浅 野 功

毎年秋に行われる恒例の「鹿島台市民文化祭」にシナイモツゴ郷の会の一員としてほぼ毎年参加させていただいています。この文化祭を通して、実家の近所の方、同級生等々、日頃逢うことができない方と逢うことができ、また、地域の行事参加の少ない私にとって大変有意義な行事参加となっています。今年は10月31日～11月1日の開催でした。

さて、シナイモツゴ郷の会ブースには、活動紹介の資料、解説や写真が展示され、モニターではテレビ局による取材、放送された番組がを紹介し、会の活動状況が理解できる内容となっています。本会の魚取り名人による鹿島台地域内に生息する川魚（メダカ、タモロコ、ヨシノボリ、フナ、スジエビ、ザリガニ、ドジョウ）また、保護種のもちろんシナイモツゴやゼニタナゴなど各水槽で展示、ヒシの試食コーナー等々狭いながらも見事に凝縮されたブースとなっています。ご年配の方や友達同士、小さいお子さんを連れただご家族と幅広い年齢の方々が訪れました。

年配の方々は水槽の魚を見て「昔う～んといだったよー」といいながら、昔を懐かしむ思い出を話してくれました。昔の豊かな環境の良さを実感できる一瞬でした。小さい子供たちは展示されている魚に興味深く目を見張り、中でもザリガニに怖がりながらもタッチしたり捕まえたりしている姿を微笑ましく見ることができました。将来「郷の会」のメンバーに？ 次回はザリガニやドジョウ、ヒシなどの「タッチ証明書」など発行し、興味関心を深めていければなどと思いました。

文化祭開催中、ヒシ実の皮むきの妙を披露しながら交流を深める会員、実践を通しての生きた説明をする会員、また会場準備や撤収作業を手際良く行っている会員の皆さんにいつも感心しながら参加をしています。次回もさまざまな文化参加団体との交流も楽しみに参加したいと思っています。



鹿島台文化祭で毎年ぎわうシナイモツゴ郷の会のブース

山谷の生物調査メモ 鈴木 光太郎

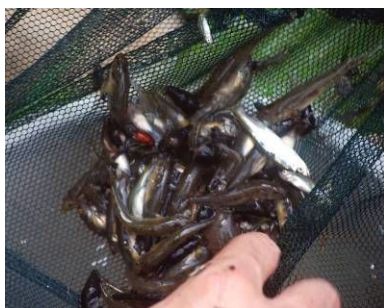
7月26日(日)、9時半から郷の会の会員と地域の方、子供達の二十数人で、市道山谷線北側、広長川下流の宮の沢付近から、上流の生袋ため池までの2kmを調査。八幡田市道と交差してからは市道の南側を上流に向かう。



大人も子供も楽しい生き物調査
「ホラ！いっぱい入ったよ」

橋の下や、堰の場所、水田からの用排水受口など5箇所を網ですくった。11時半に終了し山谷公会堂に集まって会合。三国さんが司会で坂本さんが結果説明。山谷さんが挨拶。

魚類は12種類で、フナ、モツゴ、ドジョウ、オイカワ、タモロコ、タイリクバラタナゴ、ジュスカケハゼ、



網に入った小魚たち

ヨシノボリ、メダカ、ゲンゴロウブナ、スナヤツメ、シマドジョウ。その他の5種類は、シジミ、カワニナ(※蛍の餌)、ヌカエビ、アメリカザリガニ、



調査後の結果報告・勉強会

オタマジャクシなど。田んぼの圃場整備が終わって1年にして、ここまで回復し、他地区に見られない多種類の生物が棲み続けている。

池干しレポート 坂本 啓

平成
21年9月
6日(日)
に大崎市鹿
島台広長地
区のため池



水を抜いてみんなで網を曳きます

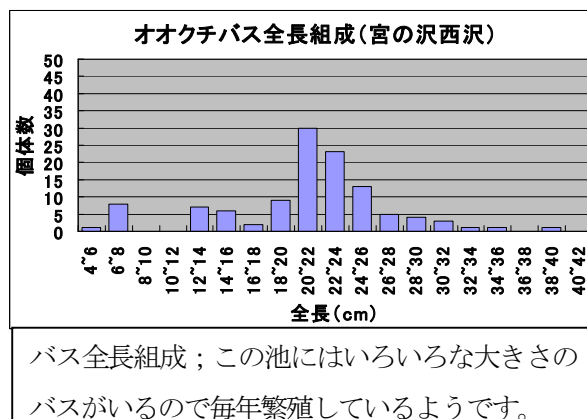
で池干しが行われました。

当日は広長地区住民とシナイモツゴ郷の会会員約50名が参加しました。オオクチバスの生息が確認されている2つのため池の池干しを行い、合計301尾のオオクチバスを駆除しました。この他に捕獲した魚類は30cm以上のギンブナ2尾のみで、まさにバスだらけのため池となっていました。



たくさんのバスを測定

駆除されたオオクチバスの全長組成を以下に示します。全長20cm台のバスが多く見られ、当歳魚と思われるバスはあまり見られませんでした。これは、慢性的な餌不足により、共食いが行われているものと考えら



れます。

今回の池干しでは完全池干と長期干出によりバスを完全駆除しました。密放流を監視しながら、今後も定期的にモニタリングを行っていく必要があると考えます。

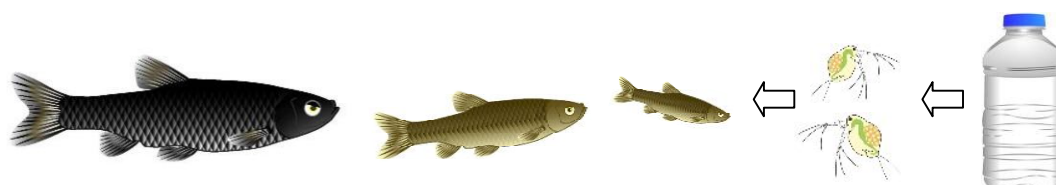
“ペットボトルを利用したミジンコ簡単培養技術開発” (ミジンコ培養実験)

久保田龍二



【初めに】

シナイモツゴ郷の会では、シナイモツゴ人工繁殖を簡易化し、ふ化稚魚をガラス水槽で観察しながら育てることで、多くの人に関心を持ってもらい里親を増やしていきたいと考えています。そのために、ふ化稚魚の餌となるミジンコをペットボトルで誰でも簡単に増やすことが出来るようにするために、本実験を会員6名のメンバーで行いました。



【実験材料】

ミジンコ培養に必要な道具は、3～4Lのペットボトル（大五郎サイズ）、20L程度の透明コンテナケース（衣装ケース）これだけです!! 但し、今回はその手法を確立するための実験ということで、観察・計数用具として、水温計、カウンター、ルーペなどの小道具を用意しました。



ペットボトル



透明コンテナケース



観察計数用具

【培養及び実験方法】

ペットボトル2本にミジンコとグリーンウォーター（植物プランクトンの発生した緑色の水（GW）：ミジンコの餌）を入れ、数日後、ミジンコが増えてきたら、半分を新たなペットボトルに分割し、合計6本のミジンコボトルを作成しました。これ以降増えた分はミジンコボトルの半分をシナイモツゴ稚魚に与え、ボトルにはGW（コンテナケースに作成しておいたもの）を継ぎ足します。実験はペットボトルによるミジンコ培養の是非と分割後のミジンコ回復（増殖）状況を観察・記録しました。



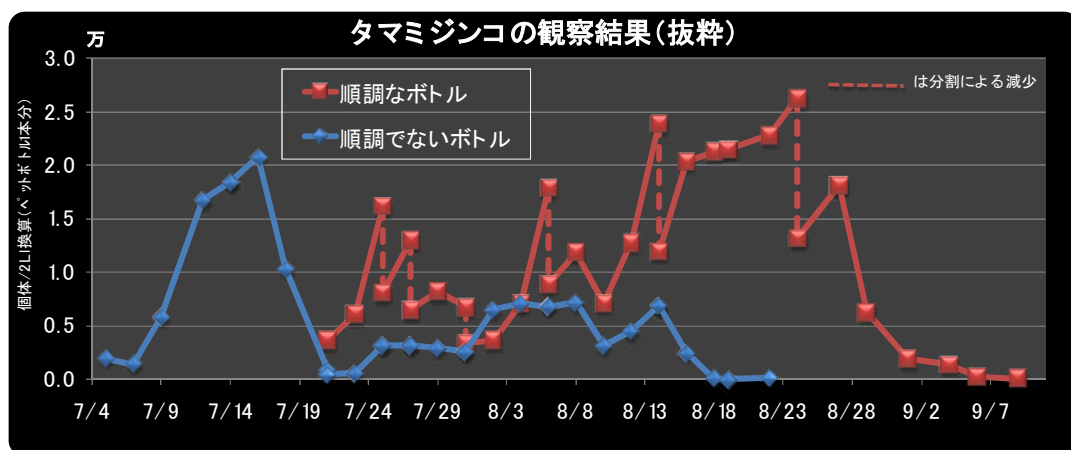
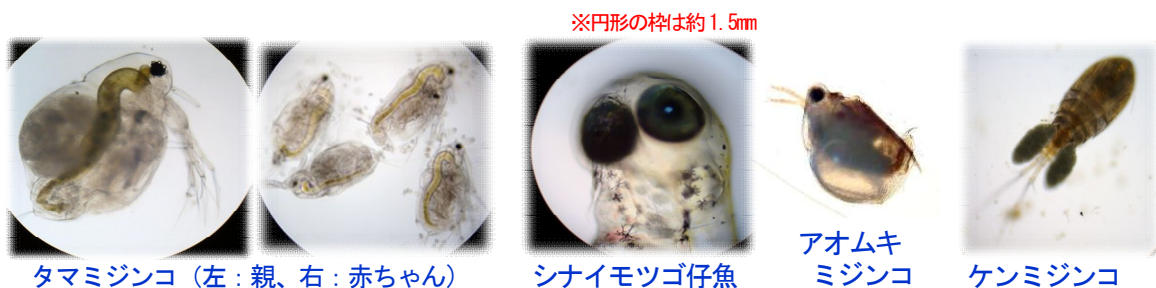
ミジンコボトル（6本まで増設）

グリーンウォーター（GW）

【実験結果】

今回の実験では主にタマミジンコの観察記録を行いました。その結果、タマミジンコはペットボトル内でも爆発的に増えることが分かりました（ボトル内には1万尾以上）。産卵後1週間で親になり産卵（一胎25尾）するためです（ネズミ算どころの騒ぎではありません）。ミジンコボトルを2分割した場合、4日で元の尾数に戻ります。従って単純計算するとミジンコボトルは3本程度必要ということになります（隔日給餌するとして）。

タマミジンコは生まれたての赤ちゃんでも0.6mm程あり、シナイモツゴのふ化直後の稚魚はこれを食べることはできません。でも、ふ化稚魚の飼育尾数を抑えて飼育すると、孵化直後は培養液中の小さな動物プランクトンを食べ、10日前後からミジンコを食べ始めるので、この培養液でもふ化直後から飼育することがわかりました。

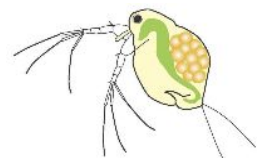


【課題と感想】

実験結果からペットボトル内でもタマミジンコは増殖することは分かりましたが、必ずしも順調に増殖していたわけではありませんでした。原因としてはボトル内の水温上昇や水質悪化などが考えられます。また、ミジンコの餌となるGWの作成にも皆さん苦労していました。

これらのことから今後は、安定的にミジンコを培養できる方法の確立とタマミジンコよりも小さなサイズのミジンコ、あるいはワムシなどの動物プランクトンの簡単培養にもチャレンジしていくことが必要と思われます。

最後に感想ですが、実験当初は義務感で行っているような状態でしたが、次第に色々な発見や実験メンバーとの交流もあり、ミジンコが可愛く見えてきて楽しくなってきました。また、ボトル内で餌を食べ、子を増やしているタマミジンコとケンミジンコなど他の種との生存競争など、必死に生きているミジンコ達に勇気づけられ、自分もしっかり生きていこうと思いました。



里親だより シナイモツゴの飼育

仙台市立鶴谷小学校校長 大槻 裕一

私が本校に着任した平成19年4月、校舎を回っていたとき、5年生と6年生の教室をつなぐ廊下に、水槽がおいてあり、中にはメダカより一回り大きな魚が群れながら泳いでいるのに気付きました。壁面には「シナイモツゴ」に関する資料の掲示がしてありました。これが、私とシナイモツゴの最初の出会いでした。というと、ちょっと大げさですが、実際のところ、私は、その掲示物を見るまでは「シナイモツゴ」という名前さえ知らなかったのです。品井沼で発見された絶滅危惧種であること、郷の会の皆さんが保護に努めていること、とても苦労して採卵し生育を試みられていること、そして、大敵のブラックバスの駆逐に努めていること…。そこには様々な情報があり、子どもたちも「シナイモツゴ」に興味を示しているようでした。

その後、郷の会メンバーの皆さん（鶴ヶ谷地区在住の方々もいらっしゃいました）が来校され、シナイモツゴの里親になってみませんかというお誘いを受けました。学校には観察池があり、シナイモツゴを育てるには適しているのではないかというお話でした。5年生の理科の題材にメダカの観察があり、「シナイモツゴ」と比べながらの学習も良いのではないかということ、やってみようということになりました。

子どもたちがバケツリレーで池を干し、準備を整えたところで卵を入れました。卵を入れるタイミングはなかなか難しいようでした。観察用にと、水槽にも入れていただきましたが、1年目はえさの関係か水温か水質か、うまく育つことができませんでした。

何とかしたいという思いで2年目の挑戦となりました。

2年目の秋に仕掛けたトラップには、大きくなった数匹のシナイモツゴがかかりましたが、まだまだ満足できる状況ではありません。

そして3年目。郷の会のみなさんも春から意気込みが違いました。うまく育たない原因と思われた、えさ（ミジンコ）を確保することに注意を注いでトライです。卵を入れる前に郷の会の皆さんがポンプを使

って池を干し、環境整備をしてくださいました。ミジンコもペットボトルで増やしてくださいっていました。

卵を入れて何日かして、室内の水槽の中では小さな命の誕生です。よく見ないとわからないほど小さな魚でした。子どもたちが知らせてくれました。

郷の会の皆さんには、子どもたちが観察しやすいようにと、虫眼鏡を準備して下さるは、解説のお手紙を用意して下さるは、ミジンコの補給をして下さるは…などなど、大変お世話になりました。

日にちが過ぎ、池の中のシナイモツゴも少しずつ大きくなり、ミジンコ以外のえさも食べるようになってきました。子どもたちは、池の岸に「シナイモツゴを育てています」という看板を設置し、いたずらしないよう呼びかけていました。小さい子が、池の中を棒でかきまわそうとしていたときに「魚がいるからやめて」と制止する場面も見られました。

用心深いのか、騒がしいときには姿を見せないシナイモツゴですが、静かに上から見れば、群れとなって泳ぐ姿を容易に見られるようになりました。私も朝、子どもたちにまじってえさをやる手伝いをし、そのときにそっと岸をたたくと魚がよっ



仙台市立鶴谷小学校里親の子どもたち

てくるようになりました。

この間、郷の会の皆さんは、土日はもちろん、長期休業日にもシナイモツゴの様子

を見にきてくださり、大切にお世話してくださいました。子どもたちの勉強の妨げにならないようにと、いつも時間を見計らいながら、来校され、様子をお話ししてくださいました。その心遣いには本当に頭が下がる思いでした。子どもたちもずいぶんと慣れ、池にシナイモツゴがいることが当たり前になってきました。そして、シナイモツゴの飼育を通して、絶滅危惧種や自然環境について考える良い機会になりました。

シナイモツゴBCC通信から (No160 : 12月15日配信)

みなさま

暖冬とは言え、雨やみぞれのたび着実に寒さが増しています。

旧品井沼の水田では今年もたくさんの白鳥のんびり餌をついばんでいます。

イベント情報

① 定例会・理事会

12月19日(土) 開花亭 17:00～

(鹿島台駅から鹿島台総合支所方向へ約200m)

② 忘年会

12月19日(土) 開花亭 18:00～

会費 4,000 円

出席される方は高橋へ17日までご連絡ください。

③ 総会

2010年2月20日(土) 14:00～

尾幌会館(鹿島台総合支所となり)

④ セミナー&成果報告会

2010年2月20日(土) 15:30～

尾幌会館(鹿島台総合支所となり)

セミナー

帰山雅秀 北海道大学教授

「淡水生態系の生物多様性とサケ」

成果報告会

藤本泰文：「フェロモンを利用した外来魚駆除技術の開発」

久保田龍二：「ペットボトルを利用したミジンコ簡単培養技術開発」

素晴らしい機会を提供してくださった郷の会の皆様に改めて御礼申し上げます。

秋も深まり、睡蓮の葉の下や沈んだブロックの下にいるのか、シナイモツゴの姿は見えなくなりました。この時期になるとえさも食べなくなってくるとのこと。来春の再びの出会いが楽しみです。

BCC通信のメール配信を新たに希望の方はご連絡ください。

発行責任者：高橋副理事長

成果情報

① ため池生きもの調査

12月5日、鹿島台広長地区と深谷地区のため池で生きもの調査を行いました。貝類の調査が主となり、2か所でタガイ、1か所でヌマガイを採取し、この中に小型貝も見られました。

また、両方の貝でゼニタナゴの仔魚を観察し、ゼニタナゴの順調な繁殖に安堵しました。

② シナイモツゴ郷の米 12月末まで販売(つくり手の会)

安全・安心・美味のシナイモツゴ郷の米を購入して、シナイモツゴを守る農業者を支援しましょう。シナイモツゴ郷の米はシナイモツゴが生息している水源地のため池の水で栽培したお米です。当会が現地調査に基づいて認証シラベルを発行しています。

シンポジウム試食会でも大好評、品質はリピーターが多いことで証明されています。

ご希望の方はつくり手の会事務局菅井氏へ連絡あるいは「シナイモツゴ郷の米つくり手の会」のHPをご覧ください。

シナイはアイヌ語で大きな川(沢)を意味します。小さな流れが大きな川になるように地道な活動を続けていきましょう。